

嗟呼、雖稟體之各殊、豈中情之曾換、滿坐之不樂、一人之發嘆、何世主之甚忍、唯樊籠之是玩、執和諧之能、應窮感、以叫屈、乃樂號呼之、懷惋、娛悲、哀之憤鬱、仁心安在、至理何拂、維聖王之御世、實一視以同恤、澤及孺動、恩逮微物、胡此強忍之行、豈異校童之狂、禍物作樂、以哭助康、損德實有甚於荒亡、愆義豈無關于得喪、般卵不毀、鳳鳥來翔、皆骨未掩、賢者遠藏、惡之萌也、巨以纖致、善之成也、大以小至、修己省身、實在矜細、存心自飭、惟其合義、慮大於小、厥德不累、省始於終、厥功何墜、是乃大保旅葵之至訓、獸臣司原之篤志、

〔當世武野俗談〕深川藝子米蝶

或時此米蝶并辨天おかん、木綿やおきりなどいふ名題者三人連立て、八幡町を靜にあゆみける時、仲町小鳥やの前にて、三人の藝子た、すみ小鳥を見て居たり、往來の人々も大勢立どまり是を見る、時に鳥やの亭主さも美しき鳥籠に入たる鳥を出し、いざ君達へ御覽に入べし、此鳥籠はかたじけなくも銀の箱にて、去やんごとなき御方を預りの籠なり、中の鳥は朝鮮渡りの鳥ひよどり、あたひ金三十兩なりと、少し自慢にて見せけり、人々見とれて居たる時、此米蝶はつと走り寄、誠に見事に美敷鳥なり、されども此鳥のためには、此いみじき籠の中、廣野をこひ敷思ふべし、此鳥此やうにかたち美敷生れずば、かゝる牢中のくるしみは有まじきぞかし、價三十兩は塵芥のごとし、小鳥の命は萬金より重し、其代金は米てうが、拂可申とて、頓て鳥を取て、大空へ飛せければ、雲井はるかに飛さりけり、鳥やを初め見物して居たりし人々、其大氣に肝を消しけり、終に其代金米蝶が拂ひけるとなり、誠に希有の者と、人々此沙汰世上に廣がりしとなり、

解鳥語

〔閑窓自語〕通鳥語女語

前對馬守藤原祐良書家人圖かたりけるは、萬里小路前大納言尙房卿としひさしくつかはれける女の、鳥のこゑをよくきゝ、まゐるよし、かねて聞きおき侍りしに、ある日かの家にまゐりて待ちけるあいだに、からすのいとうなきければ、かの老女おくの方よりいできて、あしきからすなきかな、人にけがあやまちあるにこそといひしほどに、まばしありて臺所に下仕の女の、庖丁にて手のゆびをきりしとて、なきさわぐ、さてこそかの鳥の音をしるとき、しに、つゆたがはざりけり